

日本IBM ThinkPad 元開発部長

屋代 眞

MAKOTO YASHIRO



「目標は変わりつつある。」

時代と共に移り変わる

ノートブックパソコン開発

製作者：4年A組32番

屋代 眞

場所：屋代家自宅

日時：2/1/03 19:30 ~ 19:51

10年前にくらべて驚くような進化を遂げたノートブックPC。その開発の裏ではどのような苦労と努力があったのでしょうか。ノートブックPCの開発についてインタビューしました。

日本IBMはなぜノートブックPCの開発に着手したのですか。

眞 日本は当時小型化（ミニチュアライゼーション）の技術が非常に高く、小型化が求められるノートブックPC開発は日本の強さを生かせる分野だったのです。

しかし日本で開発するとコストがかかるのではないのでしょうか。

眞 他国と同じものを日本で作ればコストは割高になってしまいます。しかし当時バッテリーなどは日本でしか生産できな

ったものもあったため、日本で開発・生産を行っても優位性があつたのです。

ノートブックPC開発当初、どのような目標を持ってThinkPadを開発しましたか。

眞 当時ノートブックPCではバッテリーライフの短さが一番のネックだったんです。とにかくバッテリーライフが長くなるようなノートブックPCの開発が重要でした。あとは重さです。持ち運びが可能な重さで無いとノートブックPCの意味が無いので。

どの会社も同じような問題をかかえていたのですか。

眞 ノートブックPC開発には最初から、大きさ、重量などの制約に縛られています。だからどの会社もCPUや磁気ディスクはとにかく最先端のものを搭載し、その他の部分 熱の処理やバッテリーで開発競争を行っていました。

IBMはその問題をどのよう

にして解決したのですか。

眞 バッテリーを例に挙げると、専門の企業により良い性能のバッテリーを開発してもらい、その性能を最大限に引き出せるように努力しました。ニッカドからニッケル水素、リチウムイオン電池と進化し、格段に電池の性能が上がったんです。しかし他社もすぐ同じような電池を使うようになってしまつので、消費電力を減らすー無駄を少なくするというところで競争力をつけて行きました。

どのような工夫をしたのですか。

眞 低消費電力の部品を開発したり、使用していない部分をこまめに切るといった機能を導入しました。

その結果はどうでしたか。

眞 バッテリーライフはお客様に満足頂けるレベルになつていきましたが、ある程度お客様の要求を満たすよつになると、今度は耐久性や薄さがより強く求めら

れるよつになつたんです。あるデバイスが開発がある程度の満足を得られるレベルになると、お客様の要求が別のところに移りそれに従つて開発目標も別のものに移つてくるんですよ。

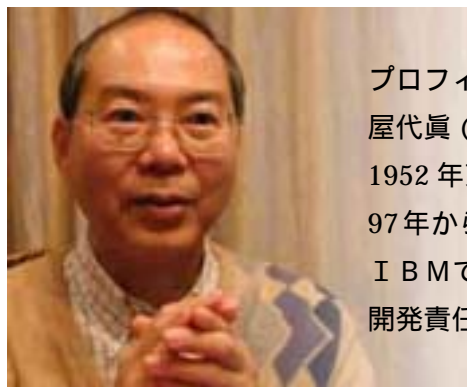
ノートブックPCはここ数年で大きな進化を遂げましたが、その一番の要因はなんですか。

眞 バッテリーの進歩もありますが、あらゆる電化製品に対しても共通して言えることが半導体の技術が向上したことだと思います。

これからのノートブックPCに求められることはどんなことだと考えていますか。

眞 最近ではノートブックPCの性能もほとんどデスクトップ型と変わらず、普通に使う分には十分なものになってきました。つまり、昔のよつに「性能が悪いからデスクトップでなきゃいけない」ということは無くなりつあるんです。これからのノートブックPCは、ワイヤレスの通信機能

を始め持ち運びをしたりいつでもどこでも使えるための利便さや、通信中のデータが盗まれないような暗号化、万が一パソコンが盗まれたときにもデータが盗まれないよつにするなど、セキュリティ関係が重要になつてくると思います。また、より耐久性に優れたノートブックPCが多く出回るよつになると考えています。



プロフィール
屋代眞（やしろまこと）
1952年東京生まれ
97年から01年まで日本IBMでThinkPadの開発責任者を務める

Interview

Interview

私が小学校二年生の時からお世話になっている、ピアノの先生、岡本ひとみ先生にインタビューしました。

(04年2月1日 15:30～ 藤沢市内、先生のご自宅にて。)

Q:ピアノはいつから始められましたか？

5歳の時です

Q:始めたきっかけとかはありましたか？

女の子、ということで父が将来も趣味として続けられるようなものとして美術か音楽をやらせようと思ったみたいで。当時は昭和30年くらいだったので今ほどピアノは誰もがやっているというわけではなかったのだけど、たまたま近くにピアノを教えている方がいらしたから始めることになったみたい。初めのうちは家にもピアノが無くて...いまじゃ信じられないような話だけど、紙鍵盤で練習していたのよ(笑)でも小学校に入った年かな？おばあちゃんが当時で言ったらすごく高かっただろうにアップライトのピアノを買ってくれたの。

Q:やめたいと思ったこととかはありましたか？

子供の頃は体が弱かったから、外で遊びまわる、ということもたくさんはできなかったし、今のように娯楽も発達していなかったから、やることといえば大好きな読書、ラジオを聴くこと、それからピアノ...という感じで。まだ子供だったから好きか嫌いかもよくわからなかったけど、何となく楽しいと思っていたから、親に「やめる？」って聞かれたら「ううん」という感じでしたね。

そして、小学校二年生の時に父が、知人の娘さんがピアニストであることを知って、その方に教えていただくようになったんです。始めに習っていた方は声楽が専門だったので、指の形とかは全然注意されていなくて...最初、先生は(弾き方に)びっくりされたみたい(笑)

その二人目の先生というのは相愛大学の講師もしていたので、「ちゃんとやりたいのなら...」と勧められて、あまり良くわからないままにその音楽教室に通うことになったんです。

そこでは聴音やソルフェージュなどを、まるで塾みたいにクラス分けをしてやっていて...上のクラスにあげてもらえたりするとやっぱりうれしくて、すごく励みにもなっていましたね。

だから体を崩して、学校を休んでしまうことはあっても、週三時間の音楽教室には40分くらい掛けて通っていましたね。

Q:芸大の高校に進まれたわけですが、自分からみるとすごく早い時期の選択のように思います。迷いはありませんでしたか？

他のことをやっていたら迷ったのかも知れませんね。でも、後に引けなくなっていく感じもあったのかな...?(笑)中学生になったとき、本格的にピアノをやりたいのなら一度東京の先生(岡本先生は大阪ご出身)に見てもらった方がいいと先生に勧められて、行ったんです。うまくなりたいたいな...という気持ちもあったと思いますけど「東京」への憧れもあって、(最初の一年くらいは新幹線も無かった中)通うことになったんです。

そうしたらその先生の生徒さんはみな、芸大・桐朋を目指す方ばかり、という感じで、自分自身も一生懸命やる限りは受かりたいな...という気持ちになってゆきましたね。

Q:受験、一人暮らしとかはやはり大変でしたよね？

そうですね。受験はやっぱり大変だったから、もう二度とはしたくない...って感じかな。(笑)でも一人暮らしは先輩・後輩と同じアパートで、とにかく自由だったし楽しかったですよ。一学年は40人くらい、ととても少なく、ピアノ科もたった10人くらいしかいなかったんだけど、みんな才能・個性のある人ばかりで「自分にはやっぱり才能無いな...」と思ってしまったこともあったけど、すごくいい刺激を受けましたね。

Q:ウィーンへの留学にはなにかきっかけがありましたか？また向こうの学校ってどんな感じですか？

親が大学卒業後の二年間なら自由に使っていいと言ってくれて、大学院に行くか留学するかのどちらかということになって、憧れだった留学をすることにしました。そして高校の時から選択していたドイツ語の国、ということで知り合いの先生を通してウィーンへ行くことになってゆきましたね。むこうでの生活もすごく楽しかったです。日本人も割と多かったし、教養課程のようなものは日本で終えていたのでピアノのレッスンを受けて、先生や門下生のコンサートを聴いたり と専門学校的な感じだったかな。

Q:好きな作曲家とかいらっしゃいますか？またその理由なども。

どの作曲家も好きですけど、モーツァルトが一番好きですね。あとバッハ。ショパンも弾いていて一番気持ちいいです。モーツァルトは本当に才能のあった人だと思う。もちろんベートーベンとかもだけどね。でもモーツァルトの場合、推敲に推敲を重ねる ということをしらずに頭の中に、譜面を書くのが間に合わないくらいに曲が浮かんできたと言うのだから、本当に才能とは思わずにはいられないよね。しかも一見単純そうで誰もが思いつきそうで、思いつけないメロディー 本当にすごいとおもいます。若い頃にはパワフルなリスト等も好きだったけど、体力的にこれからも弾いて行けそうなモーツァルトを勉強し続けてゆきたいですね。



...と先生ご自身の目標を語っていただいて終わった今回のインタビュー。すごい経歴をお持ちなのに、いい意味でそんなことを感じさせない...人間的にもほんとに素敵だな、と思います。残念ながら紹介しきれない部分も出てしまうくらいにたくさんのお話を聞かせていただいて、改めてすばらしい先生に教えていただいているんだと実感できたインタビューでした！

《先生のコメント》

インタビューというより、ただ思い出を語ってしまった気がするのですが、両親や家族があつての自分というのをこれからも忘れずに楽しんでゆきたいなと思います。

岡本ひとみ先生

S48 東京芸術大学卒

S50 ウィーン国立音楽大学卒

現在 昭和音大講師

インタビュー感想

父（屋代眞）の感想

人から話を聞きだし全体をひとつのストーリーにまとめるという訓練はとても大切なことでよい企画だと思います。今まで本人が知らなかった分野の内容を聞き出すということまでこずったり、うまく突っ込めなかったりというところも感じましたが、聞いた話をうまくまとめて、市場、技術、とお客様の変化と製品企画の移り変わりを捕らえているのではないかと思います。

自分（屋代顕）の感想

今回のインタビューでは予め質問内容などを考えて、順を追って聞いていく予定でしたが、実際にはなかなかインタビュー相手を思い通りの話の方向にむけることができませんでした。これはおそらく僕の質問の幅が広すぎた、もしくは曖昧だったためインタビューされる側がどんなことを答えていいのかわかりにくかったからだと思います。次回このような機会があったら、より具体的で細かな質問をするよう心がけ、自分が相手から何を聞き出したいのかを相手にわからせるような内容のインタビューができるようにしたいと思います。

今回のインタビューで、パソコン開発専門の人（父親）に話を聞くことにより、普段は知ることのできないノートブック PC 開発の裏側を知ることができました。ノートブック PC の開発といえば、ただ漠然とすべてを小型化するというイメージしか持っていなかったのですが、実際には時代や消費者のニーズの移り変わりによって、常に開発の目標が違ってくるということがわかりました。特に「客の要求がある程度満たされると、開発目標が変わってくる」ということに、研究開発の難しさというものを感じました。インタビューでは普段なかなか知ることができない部分を知ることができ、また自分から聞きたいことを質問できるとてもいい方法なので、今後の調べものなどの活動などに積極的に活かして生きたいと思います。

画像サイズ変更

使用ソフト：PhotoShop

1 ページ目左側の画像 元画像ファイルサイズ 410KB 圧縮後ファイルサイズ 36.8KB

2 ページ目左下の画像 元画像ファイルサイズ 422KB 圧縮後ファイルサイズ 22.8KB